

YAMANAKAMAE  
**山中前遺跡**

一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年

宮崎県埋蔵文化財センター

YAMANAKAMAE  
**山中前遺跡**

一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年

宮崎県埋蔵文化財センター

## 序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴い、山中前遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物が検出されました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成12年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田中 守

## 例　　言

1. 本書は、一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が行った山中前の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成11年4月12日から同年5月21日まで行った。
4. 現地での実測・写真撮影等の記録は主に甲斐貴充、廣田晶子が行い、空中写真撮影は業者に委託した。
5. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは甲斐が整理補助員の協力を得て行った。
6. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図を基に作成した。
7. 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色軸』に掲った。
8. 本書で使用した方位は、第1・5・9図は座標北(座標第II系)で、その他は磁北(磁針方位は西偏約5.5°)ある。レベルは海拔絶対高である。
9. 本書使用した遺構略号は以下のとおりである。  
S E . . . 溝状遺構
10. 本書の執筆は第1章—1を長津宗重が、その他を甲斐が担当し、編集は甲斐が行った。
11. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯 ..... 1

第 2 節 調査の組織 ..... 1

## 第Ⅱ章 調査の概要

第 1 節 遺跡の位置と環境 ..... 2

第 2 節 調査の経過 ..... 5

第 3 節 基本層序 ..... 5

## 第Ⅲ章 調査の記録

第 1 節 縄文時代 ..... 8

第 2 節 その他の時代 ..... 12

## 第Ⅳ章 まとめ

# 挿図目次

第 1 図 遺跡周辺位置図 ..... 3

第 2 図 山中前遺跡調査範囲図 ..... 4

第 3 図 山中前遺跡基本土層柱状図 ..... 5

第 4 図 山中前遺跡土層断面図 ..... 6

第 5 図 山中前遺跡遺物・遺構分布図 ..... 7

第 6 図 縄文時代土器(1) ..... 9

第 7 図 縄文時代土器(2) ..... 10

第 8 図 縄文時代石器 ..... 11

第 9 図 溝状遺構 ..... 13

第 10 図 溝状遺構土層断面図 ..... 14

第 11 図 表土・その他包含層出土土器・鉄器 ..... 15

# 表目次

第 1 表 出土石器・鉄器観察表 ..... 15

第 2 表 出土土器観察表 ..... 16

# 図版目次

図版 1 ~ 4 ..... 19 ~ 22

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

小林土木事務所の県道霧島公園小林線道路改築事業に伴う道路拡幅で平成10年度に計画されている事業区内に山中前遺跡の範囲内が含まれているため、県教育委員会文化課が確認調査を行う予定であったが諸般の事情で小林教育委員会社会教育課に行ってもらうことになった。

そこで小林市教育委員会社会教育課の中村真由美主事の指導で平成10年11月2日～11日に確認調査を行った。1.5m×1.5mのトレンチを11ヶ所設定しアカホヤ、カシワバンドの褐色土、暗褐色土層まで調査した結果第1トレンチの暗褐色土層から土器片が第4トレンチで褐色土層から縄文時代後期の西平式土器片やチャート片が出土し第6トレンチの黒褐色土層から炭化物が検出された。第3、7～10トレンチからは遺物は出土しなかった。

この確認調査の結果を踏まえて文化課と埋蔵文化財センターで協議した結果本調査の必要があるが10年度は埋蔵文化財センターの調査スケジュールは満杯なので本調査は11年度に延期せざるを得ないとの結論になった。この結論を基に文化課と小林土木事務所が協議を行い事業区内の本調査は埋蔵文化財センターが11年度に行うことで了解を得た。

## 第2節 調査の組織

山中前遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	田中 守
副所長	江口 京子
庶務係長	児玉 和昭
調査第二係長	青山 尚友
主査(調整担当)	谷口 武範
主事(調査担当)	甲斐 賀充
調査員(嘱託)	廣田 晶子

試掘・事業調整担当

長津 宗重(県教育委員会文化課・平成10年度)

東 寛章(県教育委員会文化課・平成11年度)

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 第1節 遺跡の位置と環境（第1図）

山中前遺跡（第1図1）は、宮崎県小林市大字細野字山中前に所在する。小林市は、北の裏日向山地、東の諸県山地北西支脈、南の霧島火山、西の加久藤盆地に囲まれた小林盆地に位置する。

本遺跡は、夷守岳（標高1,344m）東面に広がる扇状地を流れる立脇川の左岸に位置する。周辺の標高200～400mの扇状地上では、竹山遺跡（大字細野字竹山・第1図2）、前ノ原遺跡群（大字細野字前ノ原他・第1図3）、山中遺跡群（大字細野字山中・今坊・第1図4）など縄文～弥生時代の遺跡が未調査ながら数多く確認されている。特筆すべきは1963・1964年に山中前遺跡で調査が行われ、縄文時代後期の殻石住居が確認されている（註1）。

その他、本遺跡の周辺遺跡について時代別に概略を述べる。縄文時代の遺跡としては、内屋敷遺跡（大字真方字内屋敷・第1図5）、本田遺跡（大字東方字坂下・第1図6）や平木場遺跡（大字南西方字平木場・第1図7）がある。内屋敷遺跡では、前平式土器をはじめとする縄文早期前半の土器や石器類が出土している。本田遺跡では、押型文土器・前平式土器・塞ノ神式土器・曾畠式土器・石器類が出土している。平木場遺跡では、押型文土器・曾畠式土器が出土している。また、内屋敷遺跡では縄文時代早期の平地住居跡11基が、本田遺跡では縄文時代前期の竪穴住居1基が確認されている。弥生時代の遺跡は調査例が少ないが、水落遺跡（大字細野字水落・脇ノ上・第1図8）があり、弥生時代後期の土器が出土とともに、6基の竪穴住居が確認されている。

（註1）『宮崎県文化財調査報告書 第九輯』中に、「小林市中山前遺跡調査」（これは文章から推察するに、「山中前遺跡」のことであって、「中山前」は誤りであると思われる。）の記述がある。1963・1964年調査の山中前遺跡は、場所が明確でなく今回調査分との位置関係が不明瞭であることから、幾分問題はあるが同じ山中前遺跡として扱う。なお、1963・1964年調査の山中前遺跡を本告書において示す場合、「山中前遺跡（1963・1964年調査分）」と記述する。この（ ）書きのない場合は今回調査分のことと示す。

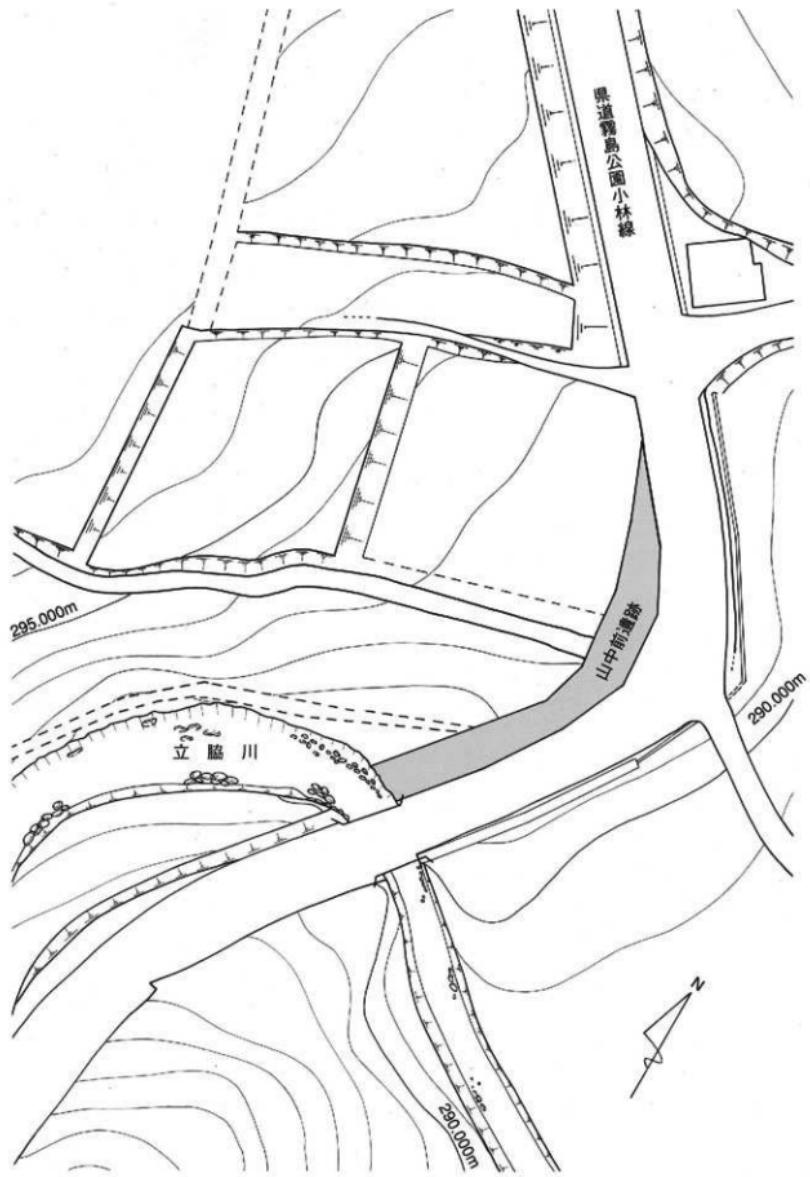
#### 【引用参考文献】

- 1964年「小林市中山前遺跡調査」『宮崎県文化財調査報告書第九輯』 宮崎県教育委員会  
1993年「小林市遺跡詳細分布調査報告書」 小林市埋蔵文化財調査報告書第7集 小林市教育委員会  
1999年「内屋敷遺跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集 宮崎県埋蔵文化財センター



- |         |        |          |         |
|---------|--------|----------|---------|
| 1 山中前遺跡 | 2 竹山遺跡 | 3 前ノ原遺跡群 | 4 山中遺跡群 |
| 5 内屋敷遺跡 | 6 本田遺跡 | 7 平木場遺跡  | 8 水落遺跡  |

第1図 遺跡周辺位置図



第2図 山中前遺跡遺跡調査範囲図(1 / 500)

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、一般県道霧島公園小林線道路改良事業予定地での試掘調査により良好な遺物包含層が確認されたという結果を受けて実施した。調査対象面積は、道路拡幅工事分の224m<sup>2</sup>となった。

重機によって、表土の除去を行った。調査区は狭小の範囲であったにも関わらず、氾濫等によって不安定な堆積状況を呈していた。作業員の人力によって表土以下の層を掘り下げるに、調査区南側で溝状遺構2条が検出された。溝状遺構完掘後、さらに第VII層下部まで掘り下げを行うと、比較的まとまった形で土器・石器が出土した。その後、第IX層まで掘り下げ確認を行ったが、遺構・遺物の検出は認めることができなかったために調査を終了した。なお、調査区を横切る形で個人所有道があったが、確認の結果遺物・遺構の残存する可能性は低く発掘調査は必要のないものと判断し、調査対象地より除外した。

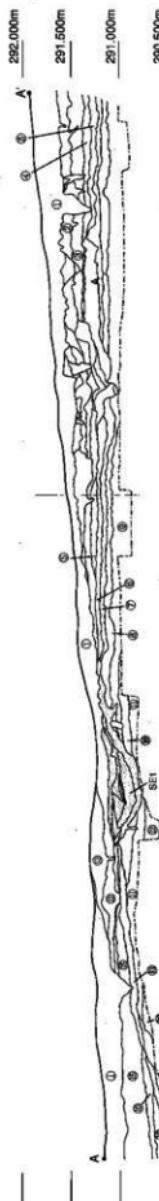
## 第3節 基本層序

山中前的基本層序を第3図に示した。遺跡が立脇川の近くに位置するため、氾濫等による浸食を多く受けたと考えられ、若干不安定な層序を形成する。第I層(表土)は、やや軟質の黒褐色土で20~30cmの厚みがある。年代幅の広い遺物を含む。第II層は、すこし硬質な暗褐色土で10cmくらいの厚さがある。第III層は、やや硬質の暗褐色土で、全体に青灰色軽石粒を含む。第IV・V層は、やや硬質の暗褐色土である。第IV層は少量の橙色・青灰色軽石粒を含む。第V層は多量の橙色・青灰色軽石粒を含む。第VI層は、褐色土を少量含む青灰色砂質土である。第VII層は、やや硬質の褐色土であり、下部からは縄文時代晩期の遺物が出土する。縄文時代晩期の包含層である。第VIII層は、やや硬質の黄褐色土であり、明黄褐色がブロック状に混入する。縄文時代晩期の包含層である。第IX層は、やや硬質の暗褐色土である。

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX

- 第I層 黒褐色土 (Hue 7.5YR 2/1) 表土。  
第II層 暗褐色土 (Hue 10YR 3/3) やや硬質  
第III層 暗黄褐色土 (Hue 7.5YR 4/4) やや硬質  
第IV層 暗褐色土 (Hue 10YR 4/4) やや硬質  
第V層 暗褐色土 (Hue 10YR 5/4) やや硬質  
第VI層 青灰色砂質土 (Hue 10BG 6/1) 砂質土の中に褐色土を僅かに含む。  
第VII層 褐色土 (Hue 10YR 5/4)  
第VIII層 黄褐色土 (Hue 10YR 5/6)  
第IX層 暗黄褐色土 (Hue 10YR 4/6)

第3図 山中前遺跡基本土層柱状図



アーティストの個性を出せるアートディレクションが、アートディレクターとして賞賛される。アートディレクションは、アーティストの個性を出せるアートディレクションが、アートディレクターとして賞賛される。

卷之三

2992. 500m

252.000mm

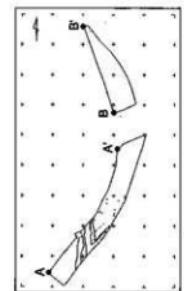
THE JOURNAL OF CLIMATE

THE BOSTONIAN SOCIETY

卷之三

「上はは結婚くじ士官に」は非常に多く、土官は「上はは結婚くじ士官に」に多い。褐色色と茶色を含む。別名「茶・茶褐色」と「茶褐色」。茶褐色の「茶」は「茶」の本音である。

「Sauvage」は、主に「男性用」香水であり、土産にはよく「男性用」と書かれていた。また、「Sauvage」の名前は、フランス語で「野性」や「未開拓地」を意味する言葉である。



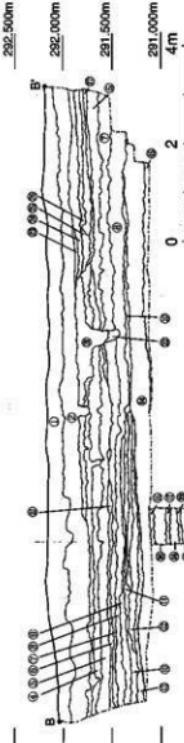
前田慶次  
黒色土子。表土。底土。底土層の上層。

○**土色**：土色は、きめ細かく、土質はしまりがある。  
○**泥色**：泥色は、土色上、泥炭質の土質で、しまりが悪い。  
○**砂色**：砂色は、土色上、灰褐色で、土質はしまりがない。  
○**青色**：青色は、土色上、灰褐色で、土質はしまりがない。  
○**黒色**：黒色は、土色上、灰褐色で、土質はしまりがない。  
○**茶色**：茶色は、土色上、灰褐色で、土質はしまりがない。  
○**緑色**：緑色は、土色上、灰褐色で、土質はしまりがない。  
○**黄色**：黄色は、土色上、灰褐色で、土質はしまりがない。  
○**白色**：白色は、土色上、灰褐色で、土質はしまりがない。

【解説】  
●枝葉色：土色よりやや濃い緑色（葉の裏面は白い）  
●葉形：卵状披針形、葉幅1.5mm、葉長3mm  
●葉質：薄肉質、葉縁は滑らか  
●葉脈：葉脈は網状脈、葉脈は葉の裏面に浮き出る  
●葉面：葉面は滑らかで、葉面には毛はない  
●葉裏：葉裏は滑らかで、葉裏には毛はない  
●葉の裏面の色：葉裏は緑色（葉裏の裏面は白い）  
●葉の裏面の脈：葉裏の脈は葉裏の裏面に浮き出る  
●葉の裏面の表面：葉裏の表面は滑らかで、葉裏の表面には毛はない  
●葉の裏面の裏面：葉裏の裏面は滑らかで、葉裏の裏面には毛はない

●**土質**：主に砂質土。土質はやや重め。乳白色スコリヤ質（約2～10mm）を多少含む。  
●**地質**：主に褐色土。土質は少ししまりがあり干燥する。土は細粒・粘性がある。

「Sauvage」は、主に「男性用」香水であり、土産にはよく「男性用」と書かれていた。また、女性用の「女性用」香水は、一般的に「女性用」と書かれていた。



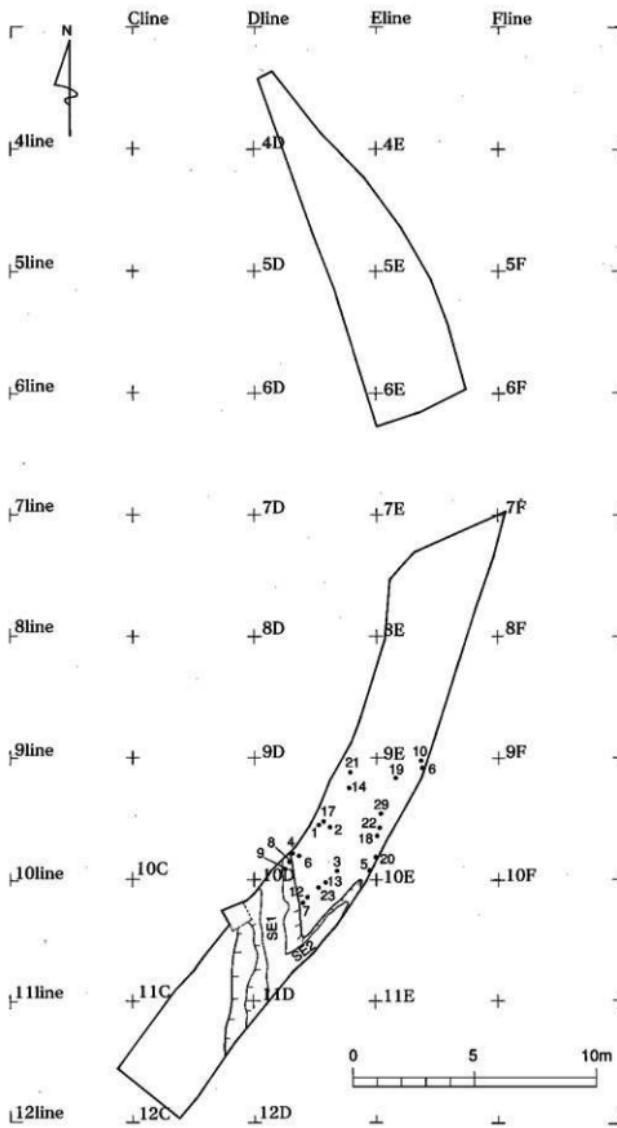
B~B' 土層註記

第Ⅱ層：暗褐色土。基本層序の第Ⅱ層。下部の部分的なところに乳白色コリア層を含む。

黄褐色色鉱石層(約10m)。白色矽質砂岩(少約1~7mm)を少含む。

土質はかたく粘性あり。土質はかたく粘性あり。

新灰褐色のゴリゾー工。模様褐色十筋(セ筋 5mm)を含む。食性は不明。



第5図 山中前遺跡遺物・遺構分布図(1/200)

## 第三章 調査の記録

### 第1節 繩文時代の遺構と遺物

基本層序の第VII層(第3図参照)の下部より土器・石器が出土した。

#### ・土 器(第6図・第7図)

繩文時代晩期に位置づけられる土器が出土した。それらは、器形や文様により分類が可能である。ここでは、分類の基準と根拠を示し、若干の説明を加える。なお、本書に掲載した資料についての詳細は観察表を参照されたい。

#### 1類(第6図1~3)

外側に向けて大きく開く口縁部で、頸部と胴部が「く」字状に屈曲する。口唇部は断面形が舌状に尖る形状を呈する。器壁は7~8mmと薄い。外器面・内器面ともに、幅広い板目状工具を用いて横方向に丁寧なナデを施す。頸部の屈曲部分には、調整境界の可能性もあるが、段を設けている。

1は口唇部に継位3本の短沈線を施すリボン状突起をもち、口唇部がわずかに内傾する。2は内器面に2つの穿孔をもち、そのうちのひとつは未貫通で外器面に達していない。3は口縁部のみの出土であるが、2と同一個体の可能性がある。

#### 2類(第6図4~6)

いずれも口縁部のみの出土である。口唇部は、断面形が方形状を呈し、若干肥厚させる。器壁は薄い。内外器面ともに横・斜方向に粗めのナデを施す。

4は内・外器面に斜方向の、6は内器面に横方向・外器面に斜方向のナデを施す。いずれも器壁は薄く(厚さ7~8mm)、口唇部を若干肥厚している。5は風化著しく詳しい調整等は不明であるが、断面形などから察するに2類に入ると考えられる。

#### 3類(第6図8~10)

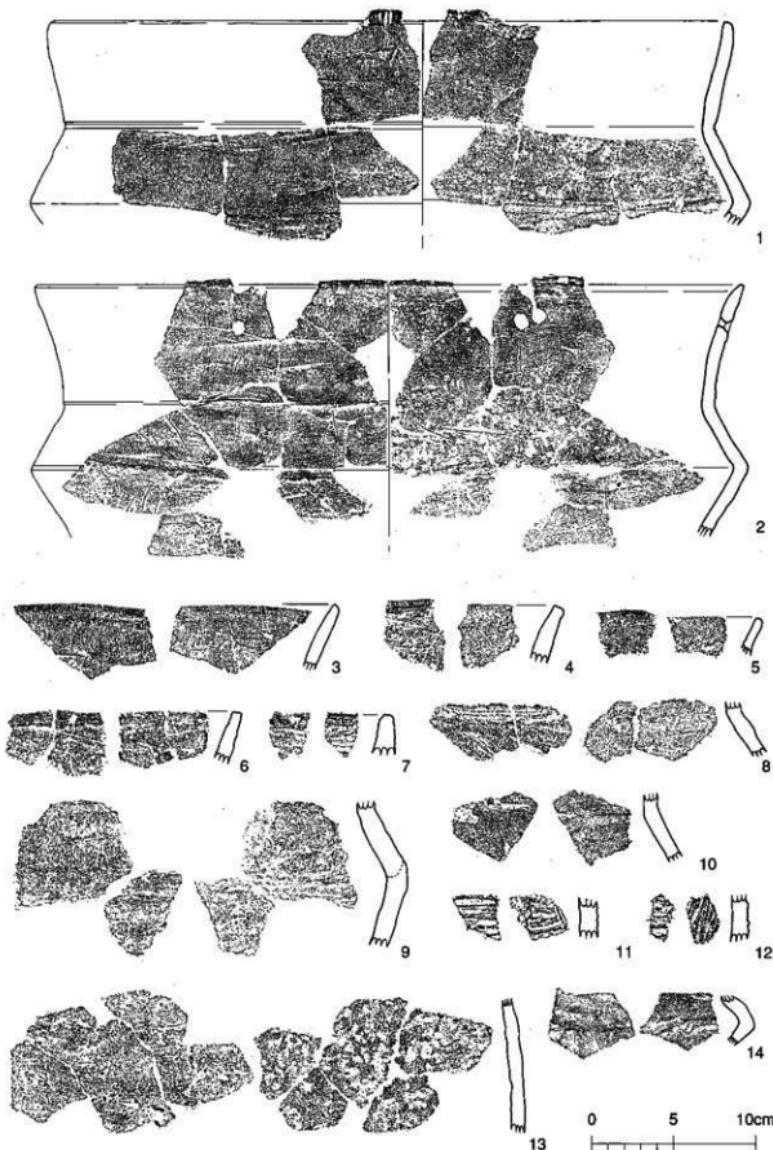
1類同様胴部が「く」字状に屈曲するが、若干緩やかな屈曲である。器壁は10~13mmと厚めである。外器面・内器面ともに、板目状工具を用いて横・斜方向にナデを施す。ナデ調整は若干粗めで工具痕が条痕のように残る。

8・10は頸部から胴部にかけての部分である。いずれも頸部の屈曲部に、調整境界の可能性もあるが、段を設けている。8は、外器面は斜方向・内器面は横方向にナデを施す。10は、内・外器面ともに斜方向にナデを施す。9は胴部であり、緩やかに「く」字状を呈する。内・外器面ともに横方向のナデを施す。

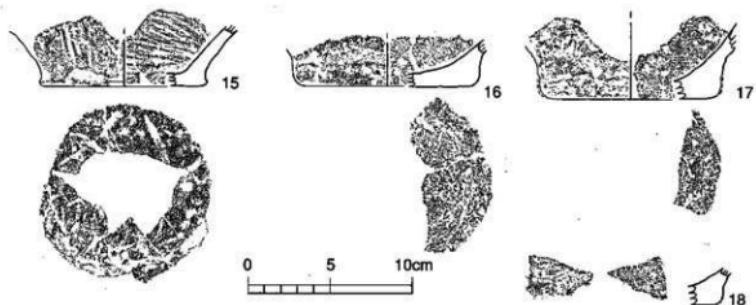
#### 4類(第6図7・11・12)

いずれも小破片のみの出土である。内・外器面ともに、横または縦方向の条痕を施す。器壁は厚さ約10mmとやや厚めである。

7は断面形舌状を呈する口縁部である。内・外器面ともに横方向の条痕を施す。11・12は胴部片であり、同一個体だと考えられる。いずれも、外器面に横方向の、内器面に縦方向の条痕を施す。



第6図 繩文時代晩期土器(1)(1/3)



第7図 繩文時代晩期土器(2) (1/3)

#### 5類(第6図13)

13は深鉢の脇部片である。外器面はススが付着しており、横方向のナデを施している。内器面の調整は剥落しており不明である。

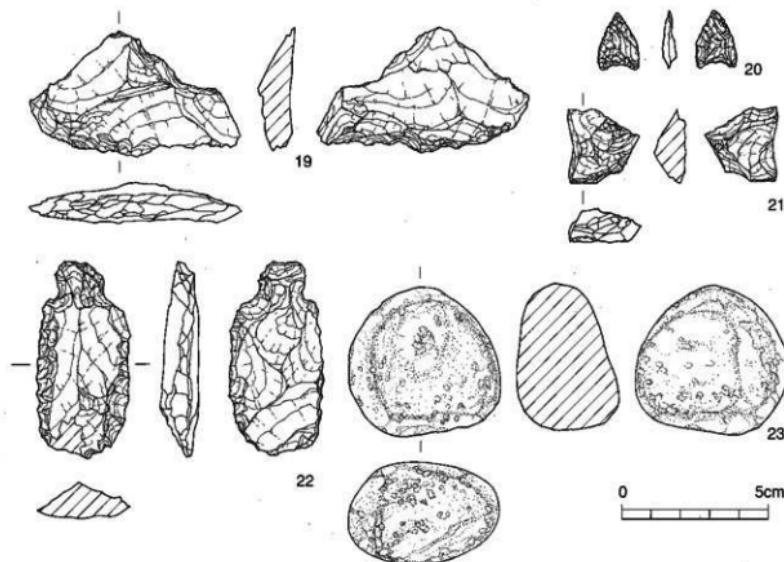
#### 6類(第6図14)

14は浅鉢の脇部片である。シャープに屈曲し、張り出しのある形態である。器面調整は内・外器面ともに横方向の丁寧なナデを施す。

#### 7類(第7図15～18)

型式不明の底部を一括した。いずれも丸底である。

15は脇部から外反し、張り出した底部端につながる。内・外器面ともに板状工具と棒状工具で器面調整を行っている。16～18は、脇部から外反し、垂直気味に立ち上がる底部端につながる。風化による剥落が激しく詳細な器面調整は観察できないが、ナデ調整を施す。



第8図 繩文時代石器 (3/5)

・石 器(第8図)

削器 1点・石鏃 1点・石匙 1点・叩石 1点・二次加工剥片 1点が出土した。

削 器(第8図 19)

19は直岩製横長剥片を素材とし、下側縁に両面から明瞭な加工を施している。上片側縁にも加工が行なわれたが、明瞭ではなく刃部として使用していたのかは不明である。

石 鏃(第8図 20)

20は青色系チャート製で、鏃身の両側縁が緩やかに屈曲し五角形に近い平面形をなす凹基無茎鏃である。表面には全面に加工を施しているが、裏面は側縁周辺にのみ加工を施している。

石 匙(第8図 22)

22はホルンフェルス製縱長剥片を素材とし、背面・腹面両面の両側縁には丁寧な加工が施してあり刃部を作り出している。尖端が欠損しているが、打面下方を加工してつまみ部を作り出している。

敲 石(第8図 23)

23は凝灰岩製で、小型ではあるが底部及び両側面の縁辺部と中心部に敲打痕だと考えられる凹部が認められる。

二次加工痕のある剥片(第8図 21)

ここでは、剥片の一部に未連続の加工を施したもの「二次加工痕のある剥片」として扱う。21はチャート製不定形剥片で一部欠損しているが、一側縁にのみ未連続の加工痕跡が認められる。

## 第2節 その他時代の遺構と遺物

時代を特定し得ない遺構として溝状遺構2条を検出した。また、縄文時代以外の遺物が若干出土している。

### ・溝状遺構(第9図・第10図)

#### 1号溝状遺構(S E 1)

調査区南側で10 Dグリッド付近(第5図参照)で検出された。調査区が狭小なため検出範囲が制限され長さは不明であるが、幅約200cmで北から南に延びる。断面形はV字状を呈し、検出面からの深さ約80~100cmである。溝の法面は左右とも2~3段の段状になっている。溝の底部中心には直径50~60cmの窪みがあり、その窪みの中からは40cm前後の大振りな凝灰岩が多数検出された。この窪みは流水の作用によって作り出されたものだと考えられ、溝状遺構が立脇川に合流する方向に向かって検出されたことと併せて考えると、流路的な機能が推測される。また、両側に方形の掘り込みが確認され、横を架けた痕跡の可能性がある。遺物は縄文土器片6点(第6図8・9)・土師器1点(第11図-27)が検出された。

#### 2号溝状遺構(S E 2)

S E 1同様調査区南側の10 Dグリッド(第5図参照)に位置し、S E 1を切る形で検出された。遺構が調査対象区外にかかり全容は確認できなかったが、幅約50~110cmで北東から南西に延びる。断面形は浅いU字状を呈し、検出面からの深さ約30~50cmである。底部と考えられる層(第10図E~E' - ⑧層)において鉄分の沈着が確認され、S E 1同様に流路的な機能が推測される。遺構に伴う遺物は検出されていない。

### ・表土・包含層出土の遺物(第11図24~29)

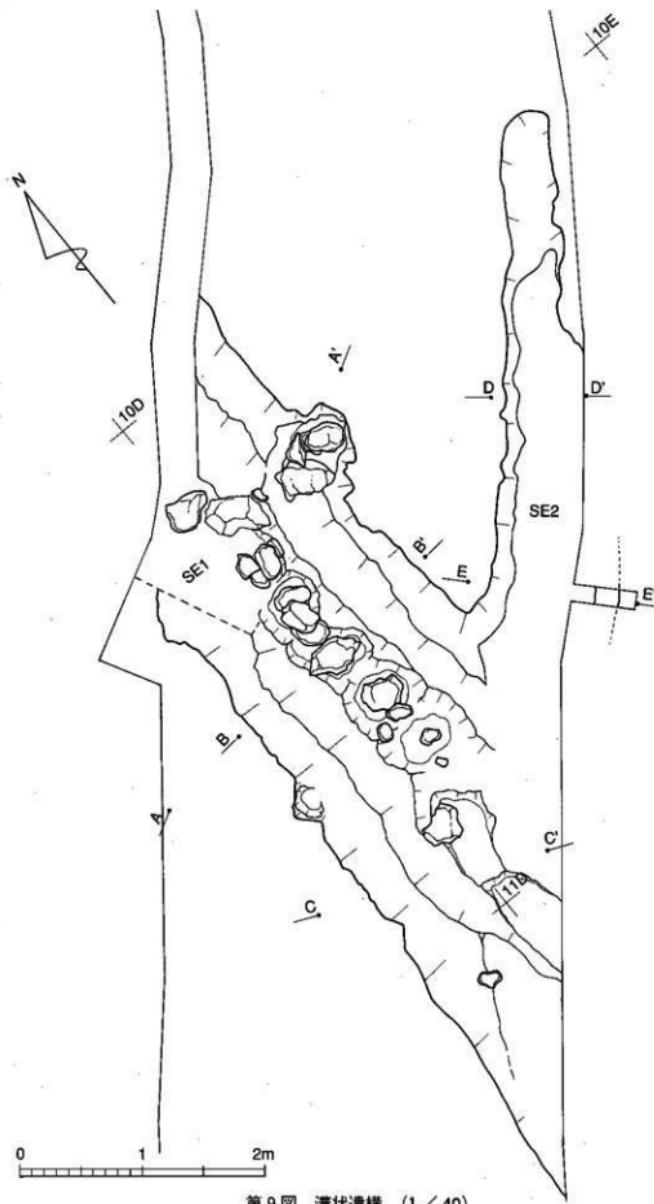
時期を限定し得ない土器・鉄器が、表土・溝状遺構・包含層から若干出土した。

#### 土 器(第11図24~28)

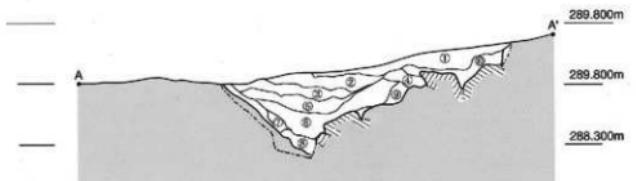
24・25は同一個体だと考えられる甕の口縁部である。S E 1と表土から出土した。いずれも、外器面には横方向のハケ日の上から横方向のナデを、内器面には横方向のハケ目を施している。口唇部にはミガキを施している。26は表土から出土した甕の口縁部である。口唇部は断面形舌状を呈し、口縁部は外反する。内・外器面には横方向の工具によるナデを施している。27はS E 1から出土した甕の胴部であり、外器面に格子目のタタキを施した後にナデを施している。28は第V層下部~第VI層上部から出土した甕の胴部である。外器面は斜方向にハケ日を施した後に横方向のナデを、内器面は横方向のハケ目の後に横方向のナデを施している。

#### 鉄 器(第11図29)

表土より1点出土した。残存状況が悪く詳細まで観察することは困難ではあるが、鉄製鋤先の一部であると考えられる。



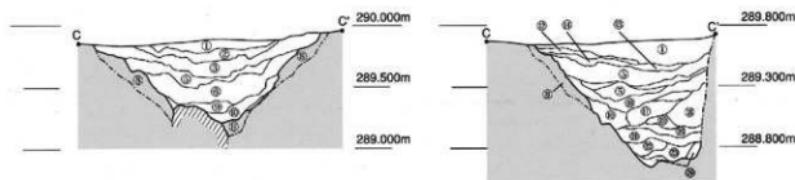
第9図 溝状造構 (1 / 40)



A-A' 主層註記

- ①暗褐色土 黒褐色土質(1cm前後)を多量に含む。  
 ②褐褐色土 やや硬め。炭化鉱を多量に含む。  
 ③黄褐色土 わずかに粘性をもつ。  
 ④暗黄褐色土 わずかに粘性をもつ。  
 ⑤黒褐色砂質土 黒褐色砂質粒(1mm前後)を多量に含む。

- ⑥黒褐色土 炭化粒と黄褐色土粒(5mm程度)を少量含む。  
 ⑦暗褐色土 黄褐色土壤(0.5～2.0cm)を多量に含む。  
 ⑧褐色土 土質はソフトでしまりが弱い。  
 ⑨褐色土 黄褐色土壤(5cm前後)を含む。  
 ⑩黒褐色土 炭化粒・黒色土粒(1mm前後)を含む。



B ~ B' · C ~ C' 土屬性記

- ①~⑥は A ~ A' の上層記述と同じ

⑦黒褐色土 黒褐色のスクリューアイ(5mm 前後)を含む。

⑧黒褐色土 黑褐色土粒(5mm 前後)を含む。やわらかい。

⑨暗褐色土 黏性わずかにあり。やわらかい。

⑩黒褐色土 しまりがある。ややかため。

⑪暗褐色砂質土 下部に黄褐色土粒(5mm 以下)を多く含む。

⑫暗褐色土 大きめの黄褐色土粒(1cm 前後)を多く含む。やわらかい。

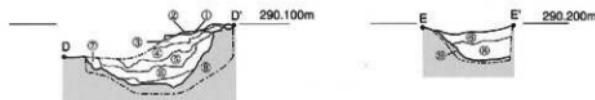
⑬暗黃灰褐色土 黄灰褐色土塊(2cm 以下)を含む。やわらかい。

⑭黒褐色土 炭化物を含む。粘性あり。ややいたい。

⑮暗オリーブ褐色土 しまりがある。かたい。炭化物を少し含む。

⑯暗首次褐色土 非常にしまりがある。下部に微化的の筋膜が確認できる。

- ⑧暗オリーブ褐色土 しまりがある。かたい。黄褐色土色(5mm 前後)を含む。
  - ⑨暗褐色土 ややしまりがあり少しあため。わずかに粘性がある。
  - ⑩暗オリーブ褐色土 砂粒は細かくしまりあり。黒色シルト土塊を含む。
  - ⑪暗褐色土 粘粒が細かくやわらかい。しまりはない。
  - ⑫黑褐灰褐色土 黒色砂質土と褐色土がラミナー状に堆積する。ややかたい。
  - ⑬暗灰褐色土 ややかたくしまりがある。黄褐色土と暗灰褐色土の混合層がある。



D~D'・E~E' 土層性記

- ①暗褐色土 小礫(2~5mm)・黄褐色土塊(7mm前後)を多量に含む。

②黄褐色土 アカホヤ火山灰とを考えられる橙褐色土塊を多量に含む。

③黒褐色土 黒褐色土粒(3cm前後)・黄褐色土(1cm前後)を含む。

④暗オリーブ褐色土 黄褐色・橙褐色土粒(1mm前後)を多量に含む。

⑤暗褐色土 橙褐色土粒(1mm前後)を含む。柔らかくわずかに粘性がある。

- ⑥褐色土 黄褐色土質(1~3mm)を含む。土質は柔らかい。

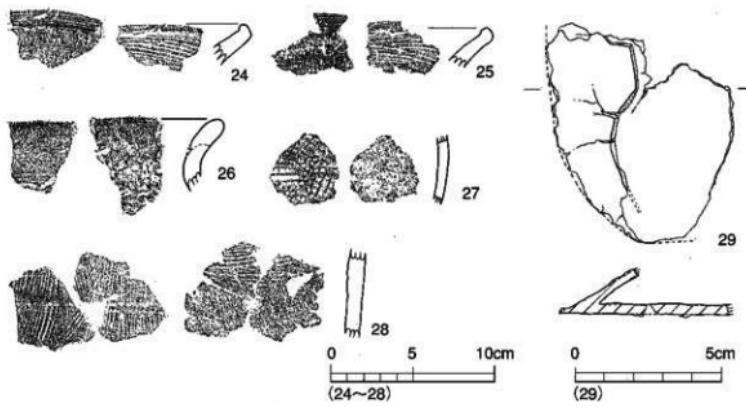
⑦褐色褐土混褐色土 柔らかく、しまりがない。本根痕跡だと考えられる。

⑧暗灰褐褐色土 上層部分に酸化が、下部にはラミナ状堆積が確認できる。

⑨深褐色土 アカクサ山脈の二次堆積地だと考えられる。



第10図 溝状造構土状断面図 (1 / 40)



第11図 出土石器・鉄器観察表 (1/3) 鉄器 (3/5)

番号	器種	石材	出土層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)
19	削器	頁岩	VII層	4.25	7.15	1.25	28.6
20	石燃	チャート	VII層	1.9	1.4	0.45	0.9
21	二次加工剥片	チャート	VII層	2.55	2.5	1.15	6.9
22	石匙	ホルンフェルス	VII層	6.6	1.3	1.2	26.9
23	礫石	凝灰岩	VII層	5.1	5.25	3.55	101.9
29	鉄製農耕具		I層	7.5	6.1	0.4	59.1

第1表 出土石器・鉄器観察表

遺物番号	種類	器種部 位	出土 地点	法量(cm)		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面			
1	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層	41.0			口唇部に縦の刻みを持つリボン状模様、工具による横方向のナデ、黒変	T鳥による横方向のナデ、黒変	灰褐色	灰褐色	5mm以下の黒・灰白色砂粒、柱状の黑色光沢柱	
2	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層	43.2			内、外両側の輪郭部、朱色の繪跡、工具による横方向のナデ、黒変	T鳥による横方向のナデ、黒変	灰褐色	灰褐色	2mm以下の灰白色砂粒、柱状の黑色光沢柱	
3	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				工具による横方向のナデ、黒変	工具による横方向のナデ、黒変	黑褐色	黑褐色	灰白色の繪跡を柱	2と同一
4	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				T鳥による斜横方向のナデ、黒変	T鳥による斜横方向のナデ、黒変	灰褐色	灰褐色	5mm以下の灰・灰白色砂粒	
5	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				口唇部に丁寧なナデ、T鳥による斜横方向のナデ、黒変	T鳥による斜横方向のナデ、黒変	浅黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰・灰白色砂粒、2mm以下の黒・灰色砂粒	
6	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				口唇部に丁寧なナデ、側方のナデ、黒変	工具による横方向のナデ、黒変	橙	にぶい黄褐色	5mm以下の灰白色砂粒、3mm以下の黒・黑色砂粒	
7	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				朱色の後ナデ、黒変	斜横方向の後ナデ	灰褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰白色砂粒	
8	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				工具による横・斜横方向のナデ、黒変	工具による横方向のナデ	にぶい橙	にぶい褐色	3mm以上の灰・灰白色砂粒	
9	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				工具による横方向のナデ、黒変	側方のナデ、黒変	にぶい橙	にぶい褐色	6mm以下の灰白色砂粒	
10	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				工具による横方向のナデ、黒変	T鳥による横方向のナデ、黒変	にぶい橙	にぶい褐色	1mm以下の灰白色砂粒、黑色光沢柱	
II	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				横方向の波線条文	横方向の波線条文	灰褐色	灰褐色	3mm以下の灰白色砂粒、以下褐色砂粒、微細黑色光沢柱	
12	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				横方向の波線条文	横方向の波線条文	灰褐色	灰褐色	7mm以下の褐色砂粒、3mm以下の灰白色砂粒、黑色光沢柱	
13	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				工具による横方向のナデ、黒変	剥離により不明	にぶい橙	灰褐色	5mm以下の灰・灰白色砂粒	
14	縄文土器	浅鉢 口縁～胴部	Ⅳ層				工具による丁寧なナデ、黒変	工具による横方向の丁寧なナデ、黒変	にぶい橙	灰褐色	1mm以下の灰白色砂粒	
15	縄文土器	深鉢 底	Ⅳ層				板状・棒状工具による横方向のナデ	板状・棒状工具による横方向のナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	6mm以下の灰白色砂粒、1mm以下の灰白色砂粒	
16	縄文土器	深鉢 底	Ⅳ層				工具による横方向のナデ、黒変	斜方向のナデ	にぶい橙	灰褐色	4mm以下の灰・灰白色砂粒	
17	縄文土器	深鉢 底	Ⅳ層	10.4			T鳥による横方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐色	灰褐色	2mm以下の灰・灰白色砂粒	
18	縄文土器	深鉢 底	Ⅳ層	10.4			横方向のナデ	ナデ	にぶい橙	灰褐色	4mm以下の灰・灰白色砂粒	
24	土師器	蓋 口縁部	表土				口唇部に丁寧なナデ、側方のハケ日の後横方向のナデ	横方向のハケ日	橙	橙	3mm以下の灰白・褐色・褐色砂粒	
25	土師器	蓋 口縁部	SE 1				口唇部に丁寧なナデ、側方のハケ日の後横方向のナデ	横方向のハケ日	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の灰・灰白色砂粒	24と同一
26	土師器	蓋 口縁部	表土				工具による横方向のナデ、黒変	側方のナデ、黒変	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白色砂粒	
27	土師器	蓋 底	SE 1				格子目のかきの後ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白色砂粒	
28	土師器	蓋 底	Ⅳ層				斜方向のハケ日の後横方向のナデ	斜方向のハケ日の後横方向のナデ	橙	橙	5mm以下の灰白色砂粒、2mm以下の褐色・灰白色砂粒	

第2表 | 出土土器観察表

## 第IV章 まとめ

山中前遺跡は、夷守岳(標高1,344m)より派生する標高292mの扇状地上に位置する。この扇状地上では、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡がいくつか確認されている。山中前遺跡も1963・1964年に調査が行われ、縄文時代後期から弥生時代にかけての遺跡として認識されていた。今回の発掘調査は、主に縄文時代晩期の遺物を検出した。ここでは簡単ではあるが、検出された遺構・遺物についてまとめを述べる。

### 1 山中前遺跡(1963・1964年調査分)について

第II章-第1節で書いたように、1963・1964年に宮崎県教育委員会が調査を行った記録がある。調査報告書(石川-1964年)によれば、出土遺構は敷石住居1基、出土遺物は縄文土器・石器であり、縄文土器が大平式・綾式であることから縄文時代後期に位置付けている。

1963・1964年調査は報告書において調査位置図が示されておらず、今回調査との位置関係については不明瞭である。報告書の記述によれば「字山中前5696-2番地」と記されており、今回調査の「字山中前5678-2・5679-3番地」と若干地点が異なる。しかし両調査区域は、「小林市遺跡詳細分布調査報告書」(小林市教育委員会-1993年)の定めた山中前遺跡の範囲に入るので、同じ「山中前遺跡」として扱う。

### 2 縄文時代について

#### 出土土器について

山中前遺跡においては、主として縄文時代晩期の黒色磨研系土器が出土した。1~3類は、若干の差異こそあるものの(1)外側に大きく開く口縁部(2)「く」字状に外反する頸部と腹部(3)器面調整は板目状工具によるナデを特徴とする。いわゆる「入佐式土器」であり、中でも新しい段階の範疇に入ると思われる。類似する土器は鹿児島県飯盛ヶ岡遺跡(鹿児島県立埋蔵文化財センター-1993年)などで確認されている。本遺跡出土7類の底部(第7図15~18)も、平底の底部端が張り出した形態であり、入佐式によく見られる底部の特徴を示している。また、同じ入佐式の中でも特徴的なものも見られる。縄文時代晩期の土器にリボン状突起をもつものは多く確認されているが、本遺跡においても確認されている。1類の中に、口縁部に3本の縦位刻目を施したつまみのようなリボン状突起をもつもの(第6図1)がある。

#### 出土石器について

石器類は全部で113点出土した。石材の内訳は、チャート89点(78.8%)・黒曜石17点(14.9%)・輝石安山岩4点(3.6%)・ホルンフェルス1点(0.9%)・凝灰岩1点(0.9%)・頁岩1点(0.9%)である。器種構成は、剣器1・石鏃1・石匙1・敲石1・二次加工のある剥片1、その他は全てチップ・フレーク類である。チップ・フレーク類は、チャート・黒曜石・輝石安山岩に石材が限られ、10Dグリッド(第5図参照)東側に集中する。このことは、10Dグリッド東側付近で石器製作が行われていた可能性を示す。

す。またホルンフェルス製石甃・頁岩製削器・凝灰岩製敲石は、周辺に同石材のチップ・フレーク類がないことから、製品を別の場所から持ち込んだ可能性がある。

### 3 溝状遺構について

溝状遺構は2条検出された。

1号溝状遺構(SE1)は、(1)埋土(第10図-C~C'間第⑧層)に鉄分沈着の痕跡が見られること(2)遺構底部と考えられる近くの層(第10図-C~C'間第②層)でラミナー状堆積が確認されたこと(3)立脇川の方向に向かっていることなどから、流路としての利用が考えられる。また、遺構が幅約200cmのV字形状に一定していることを考えると、人工的遺構の可能性がある。年代については不明であるが、遺構中の埋土中に奈良時代~平安時代と思われる甃の破片(第11図27)が出土しており、それ以前の時代の遺構であることは確かである。また両側に方形の掘り込みが1カ所ずつあり、橋を架けた痕跡の可能性がある。

2号溝状遺構(SE2)はSE1を切るような形で検出された。SE1との前後関係には不明な点が多いが、SE2は土層断面の観察によるとSE1と同時期かそれ以降の時期の遺構だと考えられる。SE2もSE1と同様、遺構面だと考えられる近くの層(第10図-D~D'間第⑧層)で鉄分の沈着とラミナー状堆積が確認されていることから、流路としての利用が考えられる。

#### 【参考文献】

- 石川恒太郎 1964 「小林市中山前遺跡調査」『宮崎県文化財調査報告書 第九輯』 宮崎県教育委員会  
小林市教育委員会 1993 「小林市遺跡詳細分布調査報告書」小林市埋蔵文化財調査報告書第7集  
堂込秀人 1997 「南九州縄文晚期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古 第31号』鹿児島県考古学会  
下山 覚 1985 「「黒川式土器」細分の為の基礎論」『鹿大考古 第3号』鹿児島大学法文学部考古学研究室  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 「飯盛ヶ岡遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(3)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター



山中前遺跡全景



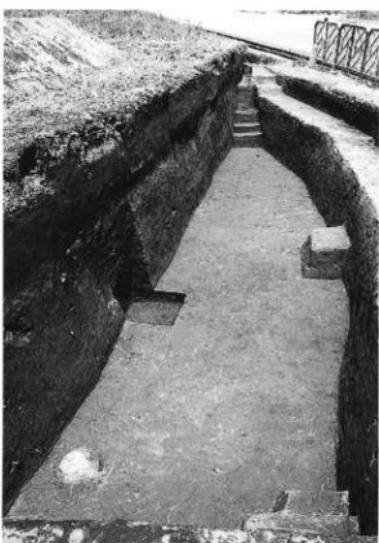
山中前遺跡遠景



調査区全景



第VIII層検出状況(南側)



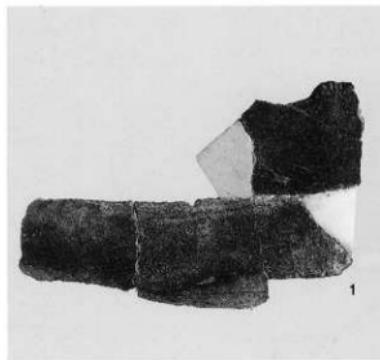
第VIII層検出状況(北側)



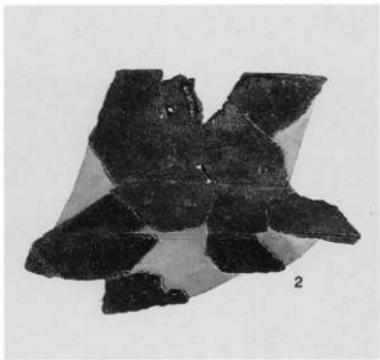
溝状遺構



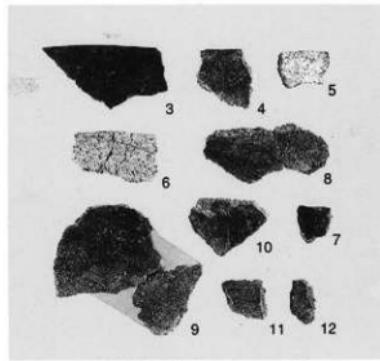
遺物検出状況(第VII層)



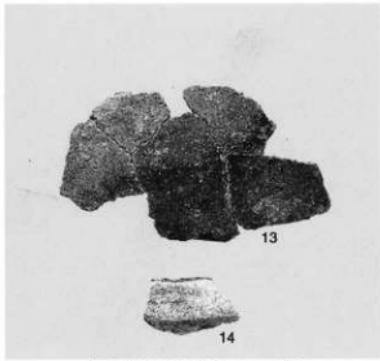
縄文時代晚期土器 1類 ①



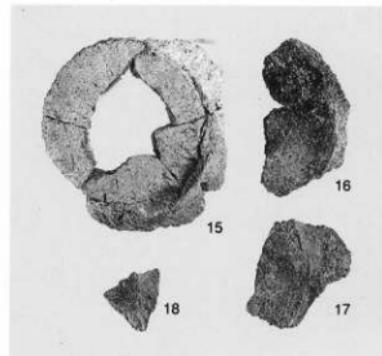
縄文時代晚期土器 1類 ②



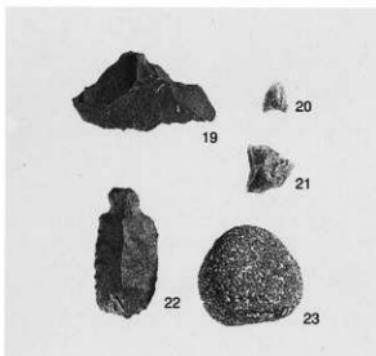
縄文時代晚期土器 1～4類



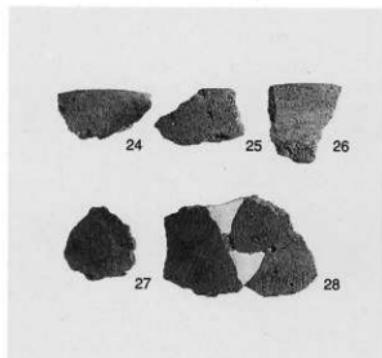
縄文時代晚期土器 5・6類



縄文時代晩期土器 7類



縄文時代晩期石器



表土・その他包含層出土土器



表土・その他包含層出土鉄器

## 報告書抄録

フリガナ	ヤマナカマエイセキ					
書名	山中前遺跡					
副書名	一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第1集					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第26集					
編集者名	甲斐 貴充					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地					
発行年月日	2000年3月31日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
ヤマナカマエイセキ 山中前遺跡	コバヤシシオオアザ 小林市大字 キンノアザヤマカマエ 細野字山中前	32°00' 04" 付近	130°58' 20" 付近	1999.4.12 ～ 1999.5.21	224 m <sup>2</sup>	県道改良 工事
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
散布地	縄文(晚期)	溝状遺構 2	縄文土器 石 器			

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第26集

## 山中前遺跡

一般社道蕃島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2000年3月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212

宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地

電話 0985-36-1172

印 刷 有限会社 鉛脈社

〒880-0855 宮崎県宮崎市田代町263番地

電話 0985-25-1758

---